

藤原てい

旅路

自伝小説

読売新聞社

旅路

自伝小説

藤原てい

読売新聞社

著者紹介 ふじわら てい

大正7年、長野県生まれ。諏訪高女卒業。昭和14年に故新田次郎氏と結婚。終戦時、3児を連れて南北朝鮮を1年がかりで縦断して帰った苦闘の記録「流れる星は生きている」が、ベストセラーとなる。

現在、東京都武蔵野市教育委員。

主な著書は「灰色の丘」「果てしなき流れの中に」「わが夫新田次郎」「かぎりなき日々に」等々。

旅路^{なほじ} 自伝小説

著者——藤原^{ふじわら}てい

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——説売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町八の一〇
北九州市小倉北区明和町一の一
〒二一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——昭和五十六年十一月十六日

第十四刷——昭和五十七年十月三十一日

定価——九八〇円

©, 1981 Tei Fujiwara

0093-703210-8715

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

日本音楽著作権協会(出)許諾番号第814498号

旅路
目次

第一章 女学校時代 7

夜逃げ 9 仲間はずれ 12 ジフテリアで入院 16 恋人、

ベスタロッチ 19 中退 22 父と娘の葛藤 26 音楽教師の

好意 30 突然の結婚申し込み 34 惑い 39 結婚拒否 43

第二章 新婚生活 47

お見合い 49 新婚時代 52 日支事変拡大 56 昭和十六年

十二月八日 59 あこがれの中国大陸 63 新京での二度目の

夏 67

第三章 放浪生活 71

新京駅へ集合 73 夫を残して当てのない旅へ 76 昭和二十

年八月十五日 80 朝鮮独立 84 夫と再会 87 戦勝国民と

敗戦国民 90 夫、ソ連軍に連れ去られる 94 日毎につづく

ソ連兵のいやがらせ 99 身を切るような風 102 寒さと疲れ

と飢えと…… 106

仲間の死 110

温飯屋で働く 114

ソ連軍

司令部に惨状を直訴 118

眠れない夜がつづく 122

物乞い 126

収容所脱出計画 130

脱出 134

地獄に仏 138

第四章 夢に見た日本

143

長野の実家へたどりつく 145

引き揚げ時の後遺症 149

東京

の官舎へ移転 153

次男のケガ 158

遺書 162

生きる力 165

遺書を出版 169

グリーン車と普通車 173

第五章 成長した家族たち

177

ベストセラー作家を妻に持てば…… 179

受験 183

夫、直木

賞受賞 187

人間として大切なことは…… 192

二足の草鞋 196

交通違反 200

赤いカナリヤ 204

娘の結婚 208

夫の死 212

残された日々 218

あとがき

222

装
丁
代
田
獎

旅

路

自伝小説

第一章 女学校時代

夜 逃 げ

バスは村役場の前で停まった。そこが終点である。降りると、晩秋の冷めたい風が袷元から吹き込んで来た。私はそこへ立ちどまって、私と同じように、この上の村落まで行く人の姿を探してみた。五、六人の客はそれぞれが、背を丸めるようにして、いそぎ足で闇の中へ消えてしまった。そして私一人だけが残された。これから家まで、およそ四キロの山道を、それもこの闇の中を一人で歩かなくては家へ帰れない。こんなにおそく、女学校の寄宿舎を出て来たことを後悔したが、もうとりかえしはつかない。バスは町の灯を求めるように、あわてて引きかえしていった。

私は、女学校の一年生だった。山の中の家から、町の女学校まで通学することは、とても無理だったので、入学と同時に、寄宿舎へ入ったわけだが、なかなかその雰囲気になじめず、家へ帰ることばかりを考えていた。やがて、学校をやめることまで考えるようになった。野山をかけ廻って遊びくらしした私には、町での生活は窮屈だった。ましてや寄宿舎の生活は、耐えられなかった。何時に起きて、朝食、登校、下校、夕食、就寝、すべて時間割の中での生活である。何回か退学を決意したが、その都度、母に止められ、先生に説教されて思いとどまっていた。

「折角、入学出来たのだから……」

そんな言葉をくりかえし、くりかえし聞かされて、つい、半年は過ぎてしまったのだが、家へ逃げ帰りたい気持は、相変わらずだった。思い立ったら、矢も楯もたまず、今日も、なかば、寄宿舎を逃げ出すような気持で、汽車に乗り、バスに乗りついで、ここまで来てしまったのだが、この闇の中へ降ろされてしまった時に私は途方にくれた。

夢中になって走り出した。袴の裾が、足にからまりついてくる。カバンが背中で揺れる。石ころの坂道を、登りかけた時に下駄のハナ緒が切れた。ハダシになった。下駄を片手に吊るさげて、また、ひとしきり走った。歩き馴れた道である。小学生の頃、この林の中の道を、往復八キロ、毎日通いなれた道だが、一人で、しかも、この漆黒の闇の中を歩いたことはない。どこに木の切り株があることも、どこに、とがり石があることも知りぬいてはいるが、闇の中をおよぐような足どりには、その見当もつかない。つい、大きな石につまずいて、もんどり打って、ミゾへころがり込んだ。そこは小川である。小学校への通学の頃は格好な水のみ場であった。

あわてて、起き上がったが、袴の裾が冷めたい。

「かあさん、 かあさん」

突然、私は泣き出してしまった。そしてまた、夢中になって歩き出した。十歩ほど歩いては、また、大声で母を呼んだ。また、十歩歩いては母を呼んだ。声が林の中へ吸い込まれてゆく。こわい。フクロウが、ねほけ声で、クッ、クッと鳴いた。山鳩だろうか、それとも、コウモリだろうか、私の大声に、すぐ近くの枝から、飛び立っていった。その羽音のすさまじさ。闇の中を、つんざくように聞こえた。私は身体をちぢめるようにして、また走り出した。静かに、静かに。

泣き叫ぶことは、森の中のケモノどもを、みんな起こすことになる。林が、ふと切れて、畑になった。その向こうには、蓼科山が見える筈である。冷めたい風が、吹きぬけていった。遠くに灯が見える。

「キツネ火だ」

その瞬間、私はそう思った。身体中を恐怖が、かけめぐった。幼い頃、祖父から聞いた、キツネ火にちがいない。キツネ火は、人間をだますのだという。その灯を求めて、人家を探そうとする人間を、おびき寄せる火を、キツネはたくのだと、聞いている。

「かあさーん、かあさーん」

思わずまた、声を出してしまった。下駄を、右手にしっかりとぶらさげたままである。足袋の裏から、冷たさが、ぞくぞくとしみ上って来る。

「かあさーん、かあさーん」

泣き出していた。

「あんな、灯の方へなんかゆくものか、キツネになぞ、だまされるものか」

そう思いながらも、涙がこぼれて来る。

急に瀬の音が聞こえて来た。土橋だ。この土橋を渡れば、もう私の村落である。小学生の頃、学校の帰り道、この土橋のたもと、ボケの実を、先をあらそって、探した場所である。その横にコブシの大樹があつて、毎年、まだあたりの雑木林は、枯木のように、寒い風に鳴っている頃に、真っ先に、白い花をいっぱい咲かせたものである。その木の下で、花びらを拾い集めて、押

し花を作った。

「春だ、春だ」

仲間達は、うたい上げた。山国の、寒く長く暗い冬の生活から、やっとのがれて、春をむかえるよろこびは、ひとしおだった。

その橋を渡った。そしてまた、走り出した。村落の灯が見え出した。

「かあさーん、かあさーん」

丘の上で、大声を上げた。聞こえる筈もないけれども、また、呼んでみた。そして、真一文字に坂をかけ降りた。

「かあさん、かあさん、かあさん」

縁側から、早口で、そう呼びながら、私は飛び上がっていった。下駄をぶらさげたまま、袴の裾をぬらしたままの姿で。

「もう、女学校、やめる、もうやめる……」

驚いている母の背に、そう云って、しがみついていた。

仲間はずれ

学校もきらい。友達もきらい。寄宿舎もきらい。町での生活にもなじめない。先生にもなかな

かなじめない。

こんな毎日の中では私は一人で黙って暮らす以外に方法はなかった。寄宿舎から学校までの道がおよそ五分。角間川ぞいの道を一人で歩いてゆく。裏の林にこぶしの花が咲き、つづいて梅も桜も、いっせいに咲き出した。道ばたの家の垣根から、連ぎょうが、あざやかな黄色い花を、春の日に輝かせていた。長い冬が終わりをつけて、いっせいに春をうたい上げる中で、いよいよ私は孤独の世界に入ってしまった。相部屋の友達が、たわむれさわぐのを横目で見ながら、いつの間にか、逃避の場所を本の中へ求めていった。

「勉強家」

これが私につけられたニックネームである。これは決してほめ言葉ではなくて、変わり者、点取り虫、利己主義者、そんな意味を持っていた。学校をやめよう、とくりかえし考えながら、ついその決心もつかずに、ずるずるとおし流されていく自分の生活がみじめだった。

「友達なんかいるものか」

そう思う反面、やはり友達がほしかった。

きびしい寄宿舎の掟で、許可なくしては外出は出来ない。もちろん外食は絶対にだめ。雑誌も学校で許されたもの以外はダメ。映画を見ることは固く禁止。こんな中で、テレビがあるわけではない、ラジオがあるわけでもない日々。友達は、それぞれの相手を選んで、上級生と、下級生、あるいは、先生と生徒、そうした仲良しのカップルが出来上がって、かなり密度の濃い交際が始まっていることも知ってはいた。うす暗い階段の下などで二人して話し込んでいる時、横をそっ

と通りぬけながら、私は邪魔者であることを、否応なく意識させられたりしていた。

「お風呂の番ですよ」

上級生の言葉である。寄宿舎の風呂は上級生から順番に入るもので、一年生はいつも一番後になる。その中でも、どうしたわけか、私の番はそのまた一番後である。

「仲間はずれ」

という言葉がある。たしかにそれは私であると思つてはいたが、別段苦痛ではなかった。仲間はずれでも、本を読む時間があっていいと、考えていた。

こわい。夜おそく、長い廊下を渡つて、食堂のわきを通りぬけて、炊事場を横切り、その先の便所の並びに風呂場があった。ハダカ電球が所々にぶら下がっているだけで、隅にはクモの巣が張っていたりする。その風呂へ私は一人が入った。入舎した当時、上級生から聞かされた怪談が、次々に頭にうかんで来る。やれこは酋長しゅうちやうの墓跡だったの、深夜は階段が一段ふえるの、絹ずれの音がするだの、お化けが出るの、そのような話を集会のあとでくりかえし聞かされていた。

一人で息を殺すようにして風呂桶に身を沈めていた。その時、裏庭のボブラの枝に風の渡る音がした。私は身をちぢめた。突然に、ガラス戸が、ガタガタと鳴り出した。

「あっ！」

二、三回、ガラス戸を爪で引っかく音がある。戸外は真の闇である。全身が鳥肌とりはだ立って、ふるえ出した。いきなり風呂から飛び出すと同時に、舎監室をめがけて私は走り出した。廊下を渡り、近道をして、食堂の中を突っ切り階段のわきから玄関を通りぬけ、いきなり、舎監室の障子